

所属・資格 体育学科・教授

申請者氏名 鈴木 理

研究課題		体育授業者による「当事者研究」の方法論的検討
報告の概要	研究目的 および 研究概要	体育授業研究の知見から導かれる「優れた授業」とは、教師が適用した指導技術によって「効果的な指導（effective teaching）」に成功した授業であると解される。とはいえ、現場を預かる教師たちの大多数にとって、授業の一々に精密な観察分析を施して技術的達成を測定評価することはおよそ現実的ではない。元より「優れた授業」に纏わる知見をどれほど演繹しても、そうした無色透明で匿名的な言葉では、児童生徒の成長を期して今まさに「この授業」に臨んだ〈私〉の「手応え」を言明するには遠く及ばない。むしろ授業研究は、現場に立つ〈私〉が日々向き合う「ありふれた日常の授業実践」において立問され、その考究成果は〈私〉自身の省察を通じて日常へと埋め戻されるべきであろう。そこで本年度の研究では、現職教員との定期的なミーティングを通じて、体育授業を担当した授業者自身が、児童生徒や自らの「変容（成長）」をどのように捉えているのかを探索した。
	研究の 結果	ミーティングにおける語りを通じて、現場を預かる教員たちが置かれている（巻き込まれている）状況が次のように顕になった。ある授業について「当事者でなければ成し得ない〈私〉の言葉で語り出す」ことを促発する「当事者研究」を体育授業研究の一つの方法論として立ち上げる上で、この課題を独力で遂行するよう授業者に求めることは現実的ではない。1980年代以降の国際的な教育改革を通じて、現場の実践者（授業者）は常に「説明責任」という重石を背負いながら授業を運営している。そこでは「〈私〉の言葉」よりも、データで示される「客観的成果」が重用され、一人ひとりの児童生徒や〈私〉の個性・具体性は丸め込まれて「見える化」されていく。大要このような所感を、特に授業改善に熱心な（定期的なミーティングに参加するような）教員の多くが抱えていることが窺われた。
	研究の 考察 ・ 反省	上記のような状況は、「指導方法」を重視した教員養成プログラムを要請するが、たとえ大学等の教員養成課程で「現場実践の予行練習」を重ねたとしても、教職着任後に実際に預かる授業は同じケースが二度とない歴史的1回性を帯びており、「練習」はほぼ通用しない。このことが「大学の勉強は役にたたない」といった批判につながっていると考えられるが、問題の根本的な解決は、「方法の工夫」ではなく、指導内容の開発に求められるべきである。一般理論から導かれる指導内容が確定して初めて、対象者の特性や授業の文脈などバックグラウンドに即した方法の議論が成立するからである。この方面の知見蓄積が火急の課題である。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表 1) 鈴木理・小水裕太・山崎竜誠（2024）教員養成段階における「模擬授業」の探究：「模擬」は体育授業者の当事者研究能力の向上に資するのか。日本体育科教育学会第29回大会（大阪）。	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物 1) 鈴木理（2024）学習指導要領「ネット型」に例示されたバレーボールの認識論的検討。バレーボール研究 26(1)：1-7	